

国際分業の諸問題(三)

吉村, 正晴

<https://doi.org/10.15017/4151201>

出版情報：経済學研究. 10 (2), pp.111-146, 1941-06-30. 九州大学経済学会
バージョン：
権利関係：



國際分業の諸問題 (三)

吉 村 正 晴

七 分業の利益について

こんどは視野を轉じて、いはゆる分業の利益の問題を取上げることにしよう。いふまでもなく、このなかには極めて豊富なる課題が含まれてをり、その比較的まとまつた研究のためには、獨立の廣汎な構想が準備されなければならない。古典派においてみられる關稅（その他の保護政策）の一般的作用に關する抽象的な把握は、問題のまつたく端初的な課題にすぎず、これは更に、農・工生産力の差別と聯繫を強調するリストの見地によつて補足されなければならない。しかし、リストの見地もまた、この差別と聯繫とに關するその細部的な諸規定は論外に措くも、きはめて一般的な形式において農・工の關係を論ずるにすぎず、そこでは何よりもまづ、兩者の關係の歴史的な諸形式に關する考察が省略せられてゐる。しかるに、農・工の關係は、それ／＼の國民經濟、更にまた、それ／＼の經濟的時期によつて、

種々の異なる形式としてあらはれるものであり、それにしたがつて、分業あるひは關稅の作用も相異らざるをえない。例へば、おなじ工業關稅も、それがフランス、イギリス、ドイツ、アメリカの國民經濟に及ぼせる作用、その各經濟時期における意義はそれ／＼異り、おなじ農業關稅も、イギリスの穀物關稅とドイツの穀物關稅とはその歴史的意義を異にする。關稅のもつこれらの種々なる作用のうち、歴史的に重要な若干の基本的諸類型に分析を加へることは、關稅論のきたるべき最も主要な課題をなすものであり、リストの見地はかかる展開によつて補完されなければならない。

しかし、いまこれらすべての計畫に立入ることは、もとより望まれない。ここでは、分業、あるひは逆に關稅が國民經濟の發展に及ぼす一般的作用の考察にのみ、研究の範圍を限定することで満足しなければない。その場合、最初には、この問題に關する古典派の一般的教義、ついで、リストの體系を主たる對象に選ぶこととする。しかし、一般に行はれる如く、この兩者を自由貿易論と保護主義論、イギリス的理論と大陸的理論との對立として把握するのではなく、關稅論の構成においてこの兩者に歸せられるべきそれ／＼の地位、前者から後者にいたる論理の上同線を描きたすことに、われ／＼の分析の重點はおかれる。

I 古典派理論

(一) 最大生産物の理論

この學派の創始者アダム・スミスの自由貿易理論の構想は、國富論第四編において輸入制限を論じた第二章の次の如き諸章句によつて最も直截に表示せられる。「社會の總産業は、決してその社會の資本が雇傭しうるところを超えぬ……ある大社會のすべての成員により繼續的に使用せられうる勞働者數は、その社會の資本全體に對してある一定の割合を保たねばならないものであつて、決してこの割合を超えぬ¹⁾。」「しかるに、みづから造るよりも低廉に購買しうるある目的物にかくして國の全産業が向けられるならば、それは最大の利益を齎すやうに用ひられないことは確實である。國の産業がこれを生産すべく仕向けられるその財貨よりも瞭かに價値のより大なる諸財貨の生産からかくしてその方向を轉ぜしめられるならば、その年生産物の價値は、確實に、多かれ少かれ減少せしめられる。」「勿論、かかる法規によつて、ある特殊の製造業がしからざる場合よりも一層急速に確立されることは屢々あらう。……しかし、たとへかくして社會の産業が、しからざる場合よりも急速に、利益を伴ひながら特殊の方向に誘ひこまれるとしても、その社會の産業、あるひはその所得の總額がかかる法規によつて増殖せられうるといふことにはならないであらう。社會の産業はその資本が増殖するに比例してのみ、その資本は、その所得の中から漸次節約せられうるところに比例してのみ増殖しうる。しかるに、すべてかかる法規の直接の結果はその所得を減少せしめることにあり、そして、その所得を減少せしめるところのものが、資本および産業が自由に放任されその自然の用途を見出すに委された場合に、その資本がおのづ

1) A. Smith, The wealth of nations, ed. by Cannan, vol. 1 p. 419
2) Smith, *ibid*, p. 422

から増殖したであろうよりも、より急速にこれを増殖せしめないことは確實である。³⁾

スミスがここで輸入制限の損失（外國貿易の利益）について論じてゐるところは、おほよそ次の如きものとして理解せられる。すなはち、輸入の制限は、その社會の資本、この資本によつて動かされる勞働をして價值の大なる商品の生産から價值の小なる商品の生産に轉ぜしめるものであり、これによつてその社會の所得を減少せしめ、所得の大小に比例して、その節約を通じて行はれる資本の増殖、資本のかかる増殖に制約せられるその社會の産業活動の擴大を阻害するといふこと。

（註一）「産業の生産物とは、それが行はれる目的物または原料にそれが附加するところの（もの）である」⁴⁾

「各社會の年所得はその産業の全年生産物の交換價值につねに精密に相等しい。いなむしろ、その交換價值と精密に同一物である。⁵⁾」すなはち、スミスによる生産物價值の所得（勞賃、企業利潤、小作料）への還元論。しかし、ここで問題とせられるのは、所得に還元せられる年生産物價值ではなく、所得そのもの、特にそのうちの企業利潤にほかならない。

スミスのかかる主張に對立して、リカードは價值と富、交換價值と使用價值の差別を強調する。「アダム・スミスは、私が一度ならず指摘したやうに、富については正鵠な記述を與へてゐるにも拘らず、のちにいたつて彼はこれに異つた説明を加へて『人の貧富は、その能く購買しうる勞働量によつて定められなければならない』といふ。さてこの記述は、他の記述とは本質的に異なるものにして、確かに正鵠を

3) Smith, *ibid.*, p. 423

4) Smith, *ibid.*, p. 421

5) Smith, *ibid.*, p. 421

失してゐる。」⁶⁾「それゆゑ、價值は富と本質的に異なるものである。何故なら、價值は潤澤に依存するものではなく、生産の難易に依存するものだからである。製造業に従事する一百萬人の勞働はつねに等しい價值を生産するが、必ずしも等しい富を生産しない。」⁷⁾そして、リカアドは價值と富のかかる差別にもとづいて、外國貿易の利益を次の如く規定する。「われ／＼が一〇、〇〇〇磅を輸出向綿製品の製造に投ずることによつて、年々二、〇〇〇磅の價值ある三〇〇〇足の絹靴下を輸入してゐたものとし、そして外國貿易の中絶によつて、この資本を木綿の製造から引揚げて、これを靴下の製造にわれ／＼自身投ずることを餘儀なくせられたものとするも、資本のいづれの部分も破壊せられぬものとする限り、依然としてわれ／＼は二、〇〇〇磅の價值ある靴下を獲得すべき筈である。ただわれ／＼は、三〇〇足をうる代りに、僅かに二五〇足をえるにすぎないであろう。木綿工業から靴下製造業への資本の移動にあたつては、多大の困苦が經驗されるかもしれないが、それは、わが年生産物の數量を減少せしめることがあつても、國民資産の價值を甚しくは傷ふことはないであろう。」⁸⁾このやうにして、リカアドによれば、外國貿易は富、使用價值の數量の増大に貢獻するところ大なるも、交換價值を増加せしめるものでは決してなく、この意味において、それは、機械の發明、熟練の進歩、分業の改善^(註二)にもとづく勞働生産力の増進と等視せられる。そして、リカアドのこの立場は、彼の流れをくむ古典派の祖述者^(註三)によつて繼承せられ、しかも、それは彼等によつて、外國貿易の利益に關する最も樞軸的な教義であるかの如く、きはめ

6) D. Ricardo, Principles. Works. by McCulloch, 2 ed. p. 168

7) Ricardo, ibid, p. 165

8) Ricardo, ibid, p. 160

て重要な取扱ひを受けるにいたつた。されば、近代の理論家たち、例へばハーベラーの如きもまた、この論點をもつて自由貿易論の價值基準となし、これに「社會生産物の最大化」の思想といふ略稱を與へてゐる。

(註二) 「機械の發明、熟練の進歩、分業の改善、またはより有利な交換を行ひうべき新市場の發見によつて、一百萬人の人間は、社會のある狀態の下において、他の狀態の下で生産しうべき富、すなはち『必需品、便利品および享樂品』の二倍または三倍の數量を生産するかもしれないが、しかし、價值はこれがために少しも増加しないであらう」⁹⁾

(註三) 例へば、ミルの「原理」第十七章一、二、第十八章二、四における貿易の利益に關する記述。

前提の引用句によつて瞭かなる如く、スミスは貿易の利益を論出するにあつて、社會の産業活動を制約するところのその社會における一定量の資本、この資本の下に雇傭せられる一定の勞働者數を前提し、傍ら、社會の生産物とは、産業活動の行はれる目的物または原料に、勞働が附加するところのもの〔價值〕であり、社會の年所得はその年生産物の交換價值と常に精密に一致することを主張する。右にみたりカアの批判は、スミスのこの論點に對して向けられたものであり、そして、理論のかかる建前から、リカアの如き展開、すなはち、「社會的生産物(使用價值の數量)の最大化」の思想が導きだされることは當然である。

しかし、機械、熟練、分業の進歩にもとづく勞働生産力の増進の考察とまつたく同じく、貿易の諸結

9) Ricardo, *ibid*, p. 165

果に關する經濟學的考察にあたつてもまた、一定數の勞働者によつて生産されうべき使用價值の總量、あるひは交換價值の總量に分析の重點はおかるべきではなく、使用價值との統一において把握せられた諸商品の交換價值、國民的價值の統一としての國際的交換價值、勞賃、利潤、地代等の對蹠的諸範疇こそ分析の第一義的對象とせられなければならないことは、古典派の傳統的方法に徴して瞭然である。何らの媒介をへることなく、社會の一定數の勞働者によつて生産されうべき使用價值の總和、あるひは交換價值の總和をまつたく抽象的にのみ取上げることが、商品生産社會の論理を沒却せるほとんど無意義な企てでしかない。

(二) 分業と交換價值、利潤

しかし、貿易の利益に關するスミスの論證は、「社會生産物の最大化」の思想にきつかけを與へた右の論點だけに盡きるものではなく、それは更に次の如き論點を含んでゐる。すなはち、外國貿易は社會の所得を増加せしめることによつて、所得の節約にもとづく資本の蓄積、社會の産業活動の發展に寄與するといふ主張がそれである。この主張は、輸入制限なるものは一國産業をして價值のより大なる商品の生産から價值の小なる商品の生産にその方向を轉ぜしめるものであるといふ前出引用文の一齣によつて支へられてゐる。若し、リカードの如く、この中に「價值と富」の混同を見出すことをしないならば、スミスのこの言葉は次の如く理解せらるべきであらう。

すなはち、彼はここで、外部的に與へられた諸商品の一定の價值體系をあらかじめ前提してをり、その社會の有する生産條件をもつてすれば、この價值體系の下では、その勞働の一定量はある商品の生産に投ぜられるときにはより大なる價值（社會的價值、國際的價值）量、他の商品においてはより小なる價值量としてあらはされるといふ場合を想定してゐるものと考へられる。スミスの右の言葉に對するこの理解は、彼がその前文において次の如く述べてゐるところからも十分に傍證されう。「裁縫師は彼自身の靴を製造しようと企てることなく……靴屋は彼自身の衣服を製造しようと企てることなく……彼等は何れも、その隣人より若干優れた途においてその全産業を營み、その生産物の一部をもつて……彼等の必要とする他の何らかのものを購買することが彼等の利益たるを知る」¹⁾と。

しからば、何故分業にもとづく貿易は、社會の所得を増加せしめることとなるか。右にみる如く、スミスにおいては、分業はその社會の資本および勞働をして、價值の小なる商品からそのより大なる商品の生産に轉ぜしめるものであるといふ一齣が、これに對する唯一の解答として與へられてゐるにすぎない。制限せられざる競争、世界價格の全面的な浸透がつねに不變の前提であるならば、この場合それは完全な解答として役立ちうる。しかるに、問題は、關稅その他の保護手段に距てられて、外部的に與へられた世界價格の全面的な支配が制限せられること、世界價格と國內價格とのあひだに何らかの距離がつくられることにある。スミスのこの解答にひとくちの満足しえないことは、すでに瞭かである。

1) Smith, *ibid.*, p. 422

轉じて、再びリカアドをみよう。彼もまた、その最大生産物の思想に示されてゐるところとはまつた
く異質の見地から、換言すれば、交換價值、利潤、地代等の見地から、外國貿易の利益を考察する。彼
はいふ。「本書第六章（第七章外國貿易論を意味するものと思はれる——筆者）において、すべての商
業は、外國貿易も國內商業も、生産物の價值を増加せしめることによつてではなくて、その數量を増加
せしめることによつて有利なるものなることを、私は説明しよう」とつとめた。われ／＼が最も有利なる
國內および外國商業を營むとも、あるひは禁止法に妨げられる結果、それほど有利ならぬ商業に満足す
るを餘儀せられるとも、何れにしてもわれ／＼の有なすべき價值に相異はない。利潤率および生産せら
れた價值は同一であろう。²⁾「利潤率は賃銀下落によるのほか決して増加せしめられることなく、また、
賃銀の恒久的な下落は賃銀がそれに消費される必需品下落の結果としてのほか起りえない……それゆゑ、
若し外國貿易の擴張、または機械の改良によつて、労働者の食物および必需品が、低減された價格をも
つて市場に齎らされることが出來れば、利潤は騰貴するであろう。……若し低廉な價格をもつて獲得せ
られる諸財貨が、富者の消費する財貨のみであつたなら、利潤率には何らの變化も生じないであろう。³⁾」
彼がここで主張してゐることは、おほよそ次の事柄に歸する。すなはち、外國貿易の結果商品の價格
が低減しても（この點については、彼は何らの疑義をもたない）、その國において生産せられる財貨の價
値、および利潤率はこれによつて何らの影響（交換價值、利潤率の増加）を受けないといふ

2) Ricarbo, ibid, p. 192

3) Ricardo, ibid, p. 75

こと、ただし、當該商品が賃銀に轉化さるべき消費資料からなつてゐる場合にのみ、その價值低減は利潤率を變化せしめるといふこと。(外國貿易が利潤、地代に及ぼす影響に關しては、マルサスとの穀物關稅論争の中に彼の見解の詳細な展開が見出される——しかし、關稅論のこの具體的な分野に立入ることは他の獨立の機會に譲り、この理由から、ここではただ、「原理」において示されてゐる彼の一般的な見解のみに、研究の對象を限定することとする)

そして、彼のこの主張からは、まづ次の事柄が檢出されう。すなはち、交換價值の總量に關する前述の論點を除けば、交換價值としてはただ國民的價值のみが孤獨的に捉へられてゐるにすぎず、國民的價值の國際的價值、世界價格へのつながり、兩者の統一的把握がまづたく閑却せられてゐることである。しかるに、外國貿易に關聯して専ら問題とせらるべきは、國際的價值、あるひは兩者のつながりにほかならず、これに對する省察は決して回避することの出来ないものである。(制限貿易の状態においても、兩者のつながりはまづたく斷ちきられるわけではなく、關稅その他の制限のために、その接觸の様式が變形せしめられるといふにすぎない。それゆゑ、外國貿易の交換價值に對する作用は、自由競争下におけるこの兩者の直接的な結合と、これらの制限にもとづくそのいはば間接的な結合との對比として把握せられうるであらう)。

さて、この見地に立つならば、換言すれば、スミスおよびリカードにおいて與へられてゐる第二の方

4) Essay on the influence of a low price of corn on the profits of stock, Works. by McCulloch, 2 ed. p. 371 et seq.
On the protection to agriculture, sec. II, VI IX, Works.

法（最大生産物の理論における第一の方法とは、これはまづたく異質のものである）を選び、且つ國民的價值と國際的價值とのつながりに問題の重點をもとめるならば、外國貿易が價值、價格に及ぼす作用に關する右の如き彼等の見解は、更に次の如き考察によつて補足されねばならないであろう。

（この場合、敘述の簡潔をはかるため、三種の假設例を中心に課題の分析を進めてゆくこととする）

（1）第一例——外國貿易の作用がすべての商品價格を低下せしめる場合。

A、B二種の商品だけを假定し、その單位當り世界市場價格をそれ〴〵一〇〇磅づつ、輸入制限下におけるそのイギリス價格をそれ〴〵二〇〇磅、一〇〇磅とする。そして、イギリスおよび世界市場においてA種商品が決定的な重みをもつてゐるものと假定する。

かかる條件の下において、輸入制限の撤廢、自由貿易が行はれるにいたるとすれば、そして、この場合世界價格に何ら變化なきものと假定すれば、兩商品のイギリス價格は次の如く變化するであらう。

第一、國際間における價格競争の結果、A商品のイギリス價格は二〇〇磅から一〇〇磅に下落する。しかるに、A生産部門は支配的生産部門たるがゆゑに、イギリスの國民的價值の國際的價值、世界價格への昇華はこの部門の商品を基準として行はれる。第二、このことの結果、そして、イギリス國內における資本の競争の結果、B商品の價格もまた、A商品に準じて、一〇〇磅から五〇磅に下落する。他方、價格面におけるかかる變化に對應して、次の過程が平行する。イギリス國內において、A部門からB部

門への資本の移動が行はれ、前者の生産の國內需要に對する不足分は外國から輸入、後者の生産の國內需要に對する超過分は外國に輸出せられる。すなはち、國際分業の發展。

この第一例の特質は、次の點に見出される。すなはち、この場合には、制限貿易の撤廢にもとづく價格の下落は、専ら、イギリスの國民的價値の世界市場における評價比率の變化、同國の價格水準の一般的低下としてのみあらはれ、したがつて、それはこの國における諸商品の價格の體系、換言すれば、その相對的な關係に對しては、何らの影響も與へない。そして、このことはかならず特定の事情、すなはち、自由貿易の結果直接にその價格を低下せしめられる制限商品（A商品）の生産部門が、國民的價値の右の如き評價比率の確定の基準となる支配的生産部門をなしてゐるといふ事情に立脚するものである。しかし、ここに想定せられるかかる前提事情は、抽象化せられた純粹類型の一極をなすにすぎない。それゆゑ、これに對しては、他極としての次の第二例が補完的に對置されねばならない。

第二例——輸入商品を除くほか外國貿易の作用が商品價格に影響なき場合。

他の諸條件はすべて前者の場合と等しきも、ただ次の一點のみが第一例と異なるものとする。すなはち、さきの場合とは反對に、B種商品が決定的な重みをもつてゐるものと假定する。かかる條件の下において、輸入制限が撤去されるにいたれば、事態の變化はおそらく次の如く過程するであろう。第一、A商品のイギリス市場への流入。この結果、イギリス國內において、資本はA生産部門からB生産部門に移

動し、後者の生産物の國內需要に對する超過分はイギリス國外に輸出される。すなはち、國際分業の發展。第二、この場合、かつてA生産部門に投ぜられてゐた資本が悉くB生産部門に移動しつくすものと想定すれば、イギリス市場におけるA商品の流通価格は二〇〇磅からその世界価格一〇〇磅に低落するが、B商品の價格、したがつて、イギリスの一般價格水準には何らの變化も生じない。何故なら、假定によれば、B生産部門は支配的生產部門であり、それゆゑ、イギリスの國民的價値の國際價値への轉化はこの部門を基準として、この部門におけるイギリス價格と世界價格との一致を通じて實現せられるからである。

この第二例を第一例に對比すれば、兩者の相異點は次のところに見出される。すなはち、第二例の場合には、制限貿易の撤廢は、制限商品（A商品）の價格を下落せしめるといふ唯一の作用を除いては、その國の國民的價値の世界市場における評價比率、その一般價格水準には何らの影響も與へないこと、したがつて、その國における諸商品の價格の體系、リカアドのいはゆる比較的價値を變化せしめることである。そして、このことは第一例と正反對の前提事實、すなはち、支配的生產部門を構成するものは制限商品にあらざるB商品部門であり、この國の國民的價値の世界市場における評價は制限商品とは無關係に行はれるといふ事情に立脚するものである。

しかし、第一例も第二例も共に、思惟的に抽象化された純粹類型にほかならず、現實的には、事態はつ

ねに何らの程度における兩者の混淆として現象するであろう。それゆゑ、より具體的な形態として、次の第三例が與へられる。

第三例——第二例と第二例との混淆形態。

この場合には、A、B二商品のほかに更に第三商品Cが附加せられ、三商品の世界市場價格をそれ〴〵一〇〇磅づつ、制限貿易下におけるそのイギリス價格をそれ〴〵四〇〇磅、二〇〇磅、一〇〇磅、そして、第二商品B部門が支配的生産部門を構成するものと假定される。かかる想定の下において、若し輸入制限が完全に撤廢されるならば、事態の變化はおそらく左述の如き過程をたどるであろう。先づ、豫想せられるこの國の産業構成の變化についてみれば、次の如くである。すなはち、かつてA部門に投ぜられてゐた資本はCまたはB部門に、あるひは更に、B部門の資本の一部分がC部門に向つて移動し（この場合、A部門、あるひは更に、B部門の資本のいくばくが、C部門、あるひはB部門に移動するかは、完全競争の支配を假定すれば、世界生産およびイギリス經濟の再生産構造の如何に依存する）、その結果、この國はA商品、あるひはB商品の一部分を輸入に仰ぎ、C商品、あるひはB商品の一部分を外國に輸出するにいたるであろう。そして、産業構成のかかる變化、國際分業のかかる發展は、この國における商品價格の次の如き變動に導かれ、これに平行して過程する。第一、世界價格の壓迫によるイギリス價格の低下、その場合、イギリスの國民的價値の國際的價値、世界價格への轉化は支配的生産部門の生

産物たるB商品を通してなされることから、B商品の価格は二〇〇磅から下落して世界価格との一致點一〇〇磅に安定し、そして、この國における資本の競争の作用が加はることによつて、AおよびC商品のイギリスにおける生産価格は、支配的商品Bに準據して、四〇〇磅から二〇〇磅、一〇〇磅から五〇磅にそれ〴〵低落する。これは、諸商品の價格の體系を變化せしめることなき價格水準の一般的低下にほかならず、この限りにおいて、さきの第一例に該當するものである。第二、右の場合、支配的商品にあらざるAおよびCのイギリスにおける生産価格は世界市場價格に一致することなく、Aは世界價格よりも高位、Bはそれよりも低位にある。若し、このとき、A部門の資本が悉くC部門、あるひは更にB部門に移動しつくし、且つ、C商品に關してはイギリスの生産物が世界市場を支配するといふ純粹な場合を假定すれば、C商品においてはイギリスの生産價格五〇磅が新しく世界市場價格を決定するが、A商品は從來の世界價格一〇〇磅をもつてイギリス市場に流通し、そのイギリスにおける生産價格二〇〇磅はいはゆる伏在的價格となつて現象面下に沈潜する。A商品における生産價格以下のこの輸入價格は、それによつてこの國に流通する諸商品の價格の體系、いはゆる比較的價值を變化せしめることとなり、したがつて、價格變動のこの部分はさきの第二例に該當するものとせられうる。

第三例について、價格面における變化としてここに述べたところを表式化すれば、次のやうになる。

C 商 品	B 商 品 (支配的生產部門)	A 商 品	單位當價格 商品種類	
			イギリス價格	
一〇〇磅	一〇〇磅	一〇〇磅	世界價格	
			制限貿易狀態	自由貿易狀態
一〇〇磅	二〇〇磅	四〇〇磅		(輸入價格 二〇〇磅) 一〇〇磅
一〇〇磅	一〇〇磅	五〇磅		

右の表において、點線角括弧は第一例、細線角括弧は第二例に該當する。この意味において、この第三例は第一例と第二例との混淆形態とせられる。

以上の如くにして、自由貿易は商品の價格に對しては、區別せらるべき二種の異なる作用をもつ。さて、この二方向の作用をそれ／＼代表する右の第一例および第二例の意義を對蹠的に把握すれば、次の如くである。

第一例によつて代表せられる自由貿易の第一の作用は、價格水準の一般的低下といふ方向にあらはれる。自由貿易がかかる作用を營むのは、輸入關稅なるものは、國民的價値の世界價格への直接的統一に

對する障礙をなすものであり、これを除去することによつて兩者の直接的統一が實現せられるからにはかならない。それゆゑ、自由貿易のこの方向への作用は、輸入關稅のもつかかる障礙的作用に依據するものといふことが出来る。しかるに、輸入關稅のこの作用は、一般的にあらはせば、保護せられる商品の生産部門がその國民經濟の總過程において占める比重の如何に懸るものである。このことから、自由貿易のこの第一の作用に關しては、次の如き一般的規定がえられる。すなはち、他の諸事情を措いて問はないとすれば、保護商品がその國民經濟の總過程においてもつ比重が支配的であればあるほど、この作用の發現はますます完全でありうるといふこと、しかし、問題を極限において考察するならば、保護商品が如何なる種類のものであるにせよ、自由貿易のこの作用が全く零に歸することは殆んどありえない。何故なら、その商品部門の比重が全く零に等しいといふことはないからである。それゆゑ、これは自由貿易のもつ一般的作用の一つとせらるべきである。前出の第三例において、第一例が必然的にそのなかに包攝せらるべきものとしたのは、この理由による。

この第一の作用の結果は、次のところにあらはれる。すなはち、價格水準が一般的に低下せしめられる結果、單位當り國民的價値の對國際的比較において支配的商品の上位に列する商品、換言すれば、その生産條件において支配的商品よりも國際的に比較的有利な商品（第三例ではC商品がこれに該當する）の價格はその世界市場價格以下に低落し、これによつてこれらの商品の輸出が促進される。輸入關

税の撤廢にもとづいて商品の輸入が増大すれば、他の商品の輸出の増大がこれに對應せねばならぬことは、總過程の均衡化といふ必然的傾向から容易に推論されうるが、この均衡化の過程、輸出の對應的増大は、價格水準のかくの如き一般的低下に導かれて實現するのである。

右の如く、保護商品の生産部門が總過程において一〇〇%の比重をもつ場合には、自由貿易のこの第一の作用は完全に發現される。しかし、かかる場合は恣意的にのみ想定されうるにすぎず、具體的には、その比重はこれより遙かに小でなければならぬ。そして、この比重が一〇〇%以下であることにもとづいて、自由貿易の第二の作用、すなはち、さきの第二例によつて代表される作用が生れる。價格水準の右の如き一般的低下にも拘らず、その生産條件に關して支配的商品よりも國際的に比較的不利な商品（第二例、第三例のA商品がこれに該當する）の國內的生產價格が、依然としてその世界市場價格よりも高位にとどまつており、これらの商品が世界價格をもつて廉價に輸入せられることによつて、この商品の比較的價值が下落せしめられるといふことが、この作用の内容をなしてゐる。その場合、この作用の強度、輸入商品の比較的價值のかかる下落の程度は、この商品と支配的商品との生産條件の國際的（その國と世界市場との關係における）比較差の大きさに正比例することはいふまでもない。

この第二の作用のもたらす經濟的結果は、かくして輸入せられる商品が賃銀に直接影響をもつ一般消費資料であるか、あるひは、それが生産手段であるかによつて、次の如く區別されなければならない。

輸入商品が穀物その他の一般消費資料からなる場合。かかる商品の低廉なる輸入（國內生産價格以下の世界市場價格をもつてする輸入）の直接の結果は、その國の勞働賃銀を何らかの程度において一般的に低落せしめることであり、そして、賃銀のこの低落はそれだけ企業の利潤の増大に寄與するであろうことは疑ひをいれない。リカアドが「原理」第七章外國貿易論において、また、對マルサスの穀物關稅論争において、關稅の廢止に伴ふ利益として述べてゐるのは、主として、右の第二の作用がもたらすこの第一の結果にはかならない。

輸入商品が加工用原料その他の生産手段からなる場合。ふたたび前出の第二例にたち還り、そして、ここでは更に次の如き假定を補足しよう。すなはち、第二例において商品AはB部門の生産にもちひられる原料であり、B商品一單位の生産には〇・一單位のA商品が消費せられるものと想定する。さきの假定によれば、B商品一單位のイギリスにおける生産價格は一〇〇磅、A商品一單位のこの國における生産價格は二〇〇磅、その輸入價格は一〇〇磅であるから、加工用原料たるA商品の低廉なる輸入の結果、B商品一單位の生産費は、その生産にもちひられるA商品〇・一單位のこの國における生産價格と輸入價格との差額、すなはち一〇磅だけ節約せらるべく、この商品一單位當りの利潤量はそれだけ増大せしめられる。かくして、加工用原料Aの低廉なる輸入は、B部門、したがつてこの國の企業の利潤率の増進に寄與する。この限りにおいては、それはさきの第一の場合、すなはち、輸入商品が穀物その他の一般

消費資料からなつてゐる場合と同一の結果を齎す。しかし、ここに想定せられてゐる如く、加工用原料その他の生産手段は諸々の生産部門に均霑的にもちひられるものではなく、その消費率は各部門においてそれ／＼異なる。いま、その純粹な事例として、B部門を構成する諸々の生産部門のうち、 b_1 部門においてのみ製品一單位の生産に○・一單位のA商品が原料として消費せられる場合を想定しよう。このときにもまた、A商品の低廉なる輸入の結果、 b_1 商品一單位の生産費用が一〇磅だけ節約せられることは、さきの場合とまつたく同様である。しかし、この場合には、生産の重みはA商品の低廉なる輸入によつて何ら直接の影響を受けないの b_2 、 b_3 …… b_n 部門にあり、したがつて、この國の一般利潤率には變化は生じない（嚴密には、 b_1 部門もまた一般利潤率の形成に参加するものであり、この部門にもちひられる生産手段の價值減少の結果、たとへ利潤量に變化なしとするも利潤部分と費用部分との比例の變化にもとづいてこの部門に生ずる一般利潤率以上の超加利潤は他の諸部門に均霑し、それだけ一般利潤率の上昇に寄與するが、いまこの點は措いて問はないものとする）。そして、一般利潤率に變化なきため、商品のこの國における生産價格は、その原料A商品の低廉なる輸入による原料費用の節約に照應して低下せしめられる。その場合、低下せるこの國の生産價格と世界市場價格との差額にもとづいてこの國の b_1 部門に生ずる超加利潤に均霑せんがため、この國の資本はいちはやくこの部門に流れこみ、 b_1 商品のこの國からの輸出の發展、その世界價格のこの國の生産價格へのたえざる接近が繼起する（かかる均霑化の運動が

一般利潤率に及ぼす影響はひとまづ論外に措く。

これを要するに、輸入制限の撤廢は、第一には、その國の一般價格水準を世界水準線にまで低下せしめ、世界價格との比較において上端部に位置する諸商品の輸出を促進し、第二には、下端部に位置する諸商品のその國內生産價格以下の低廉な價格による輸入を實現せしめることによつて、その輸入商品が一般消費資料または一般生産手段から成る場合には、企業的一般利潤率の増進に寄與し、それが若干産業の特殊の生産手段から成る場合には、これらの産業に超過利潤をえせしめるか、あるひは、その國內生産價格の低下にもとづいてその生産物の輸出を促進する。そして、この兩者は外國貿易の國民經濟に對する一般的作用をなすものであり、その發現にあたつては種々の濃淡をもつて組合はされる。

スマスは單純に、外部的に與へられた價格狀態（この場合、それは世界價格に歸着する）のみを考量するによつて、この第二の作用に關する明確な規定をうるにいたらず、リカアドはまた、國民的價值のみを孤獨的に考察するがゆゑに、外國貿易の國民經濟的作用に對するその把握は、第二の作用の範圍を出えなかつた（このことは、そのいはゆる自由貿易理論が専ら「最大生産物の理論」として論ぜられる消極的な根據をなしてゐる）。しかし、自由貿易と制限貿易は、國民的價值の世界價格への直接的な統一とかかる統一に對する制限として理解せらるべきであり、兩者のこのつながりを考察することから、右の第一の作用が論出せられうる。そして、この作用こそは、外國貿易を「分業の改善、機械の發明、

道路および運河の建設、あるひは、商品の製造または運搬において労働を短縮する何れの手段⁵⁾からも區別し、それに固有の意義を賦與するところのものである。

I リストの保護主義理論

(一) 國民經濟學と萬民經濟學

リストはその經濟學の體系を特質づけるに、國民經濟學 (Politische Oekonomie, Nationale Oekonomie) なる呼稱をもつてし、彼によつて萬民主義經濟學 (Kosmopolitische Oekonomie) として把握される古典派の傳統的自由貿易理論にこれを對蹠せしめる。その場合、彼は次の如き言葉をもつて、その經濟學の國民主義的立場をあらはす——「國民經濟學、すなはち、如何にしてある特定の國民は特定の世界情勢の下において、農業、工業および商業によつて幸福と文明と強大とに到達しうるかを教へることに限定せられてゐる科學¹⁾。そして、彼はかかる國民主義的見地に立つて、ケネー以來の萬民主義經濟學、すなはち、「如何にして全人類は幸福になりうるかを教へる科學²⁾」の批判、この批判を通じての彼みづからの體系の確立に専念する。その主著「經濟學の國民的體系」はかかる構成をもつて貫かれてゐる。

古典派に對するリストの批判は、先づ前者の理論の次の如き把握をもつてははじめられる。「スミスはそ

5) Ricardo, *ibid.* p. 75,

1) F. List, *Das nationale System der politischen Oekonomie*, Werke, von Sommer, 1930, Bd. VI, S. 161

2) List, a. a. O. S. 461

の著書に『諸國民の富の性質と諸原因』と標題してゐるが、ここに諸國民といふのは、すなはち全人類のすべての國民の意味である。……永久平和の理念こそ彼のすべての論證の基礎をなすものである。³⁾「世界聯合と永久平和の理念は、理性によつても、また宗教によつても提出せられてゐることは争ふべくもない。」⁴⁾かくて、この學派の體系の基礎をなしてゐるものは、一の眞實の理念である。⁵⁾すなはち、リストによれば、「世界貿易の絶對的自由」といふ古典派の命題は、全人類の福祉を追求する萬民主義的見地から、世界聯合と永久平和の理想から導きだされた、あるひは、「その時代を風靡してゐた博愛的實驗と哲學問題解決への嗜好」に基礎をおく一個の理念にすぎざるものとせられる。そして、これにかかる理念としてみる限りでは、それは理性によつても宗教によつても要求せられる一個の眞實の理念として、彼の支援を獲得する。

しかし、ここにおいてリストは反省する。古典派のこの萬民主義的理念が實現するためには、世界經濟における次の状態がその前提條件となる。すなはち、關係諸國が經濟的發達の程度においてはほ同じ段階におかれてゐること、換言すれば、諸國民經濟の發達の均衡状態である。しかるに、彼の眼前にある現實世界は、これとはおよそ懸離れた諸國民經濟の甚だしき不均衡、具體的には、イギリスの隔絶せる工業的繁榮であつた。かかる世界の現状の下においては、「一般的貿易自由から生ずるものは、世界共和國にあらずして、支配的な工業力、商業力および海軍の主權の下に立つ後進諸國民の世界的隸屬であるこ

3) List, a. a. O. S. 162

4) List, a. a. O. S. 165

5) List, a. a. O. S. 167

とは、すこぶる確乎たる根據に基くものであり、またわれ／＼の見解によれば、その根據は覆しえられざるものである。⁶⁾「一國民の優越せる政治的勢力、優越せる富に起源し、かくて他の諸國民の征服と隸屬との上に基礎をおく世界聯合は……獨立と高度の富および政治的勢力の獲得をその使命と感じてゐるすべての國民の利益および感情と矛盾する。それは、すでにかつて存在したところのもの——ローマ人の試み——を、かつては冷い劍によつて行はれた代りにいまは工業と商業との助けをかりて、再び繰返すにすぎない。しかし、それだからといつて、野蠻への逆行であることには何らの變りはない。」⁷⁾例へば、一般的自由貿易によつて「全イギリスは唯一の無限の工業都市に發達するであらう。……母國を盟主とするイギリス諸國家の一世界が成立し、ヨーロッパ大陸諸國民はとるにたらぬ不生産的民族としてそのなかに解消せられるであらう。フランスはスペインやポルトガルと共に、このイギリス的世界に最良の葡萄酒を供給し、みづからは最悪の葡萄酒を飲むやうに運命づけられるであらう。フランスにはせい／＼若干の化粧品工業が残る程度のものであらう。」⁸⁾(かかる關係のなかに、古典派の自由貿易主義とイギリスの工業家の利益との一致點を見出すことは、ひと／＼の一致せる見解である)。

このやうにして、リストは、世界經濟の不均衡な發達狀態の下における國際貿易、換言すれば、先進的國民對後進的國民の貿易は、古代ローマとその植民地との關係にもなぞらふべき前者による後者の征

6) List, a. a. O. S. 167

7) List, a. a. O. SS. 48, 49

8) List, a. a. O. S. 171

服、後進諸國の隷屬をその必然の結果にもつことを、誰よりも鋭く指摘するのである。そして、彼によれば、外國貿易のもつこの抑壓的作用は、科學に先行すべき歴史の教訓にはかならずとせられる。ここにおいて彼は、「歴史」に據つて「哲學」、すなはち萬民主義的理念を次の如く評價する。「この學派は、將來生すべき狀態を、現實に成立せるものと信じた。それは世界聯合と永久平和との存在を前提し、これから貿易自由の大なる利益を推論する。かくしてそれは結果を原因と混同する⁹⁾」と。しかるに現實と理念、歴史と哲學とのあひだには、大なる溝渠が間在する。そこで、この溝渠を埋め、後進諸國民をして「イギリス國民が人爲的に到達したのと同一の發達段階にまで、人爲的手段によつて發達」せしめるための手段として、「政策」、いはゆる國民經濟學が要求せられる。「しかるに、目下のところ諸國民の状態には無限の差異が存在する。彼等のあひだには、巨人と侏儒、正常體と不具者、文明人と半文明人と野蠻人が認められる。……野蠻諸國民を文明化し、弱小國民を強大化し、しかも特に存在と永續とを彼等に保證することは、政策の課題である。國民の經濟的育成を實現し、國民を將來の世界的社會への参加に準備することは、國民經濟學の課題である¹⁰⁾」。

(二) 生産力の理論と價値の理論

リストの古典派批判は更に前進する。さきには抽象的に、萬民主義經濟學と國民主義經濟學として提

9) List, a. a. O. S. 167

10) List, a. a. O. S. 210

へられた古典派の自由貿易論に對する彼の經濟學の意義は、ここでは交換價值の理論 (Theorie der Tauschwerte) と生産力の理論 (Theorie der produktiven Kräfte) として、より具體的な規定を與へられる。

この場合、古典派の自由貿易論が彼によつて交換價值の理論と名付けられるのは、さきにわれ／＼が引用せる國富論第四編第二章におけるスミスの言葉がその主たる論據となつてゐるやうに思はれる。¹⁾すなはち、「社會の産業はその資本が増殖するに比例してのみ、その資本はその所得の中から漸次節約せられうるところに比例してのみ増殖しうる。しかるに、すべてかかる如き法規(貿易制限——筆者註)の直接の結果はその所得を減少せしめることにあり、そして、その所得を減少せしめるところのものが、資本および勞働が自由に放任されその自然の用途を見出すに委された場合にその資本がおのづから増殖したであらうよりも、より急速にこれを増殖せしめえないことは確實である」といふスミスの有名な言葉。彼は、スミスのこの言葉によつて代表される古典派の理論を、「如何にして富すなはち交換價值が生産せられ、分配せられ、消費せられるかを教へる科學」(セイの言葉)、價值の科學、交換の科學と呼び、「富の原因は富のものとは全く別個のものである」「富をつくる力は富そのものよりも遙かに重要である」といふ彼の有名な標語、「如何にして生産力が鼓舞、培養せられるか、また如何にしてそれが抑壓、あるひは破壊せられるかを教へる科學」²⁾としての生産力の理論をこれに對立せし

2) List, a. a. O. S. 252

3) List, a. a. O. S. 177

める。

しかし、スミスの右の言葉を一瞥すれば瞭かなやうに、そして、リストもまた公平に承認するやうに、スミスは決して「富と其の諸原因、ならびにこれら諸原因が諸國民の狀態に及ぼす重要な作用との差別を全く誤認」してゐたわけではなく、「彼の有してゐた鋭い悟性」は「諸國民の狀態は主としてその生産力の總和によつて規定せられる」ことを「一般的には明確に洞察してゐた。³⁾」それゆゑ、スミスの立場を特徴づけるにあたつて、彼の如く、經濟學に關するセイの規定をそのままこれに適用することは正確を失する。しかりとすれば、スミスとリスト、いはゆる價值の理論と生産力の理論との對蹠點は、如何なるところにもとめらるべきであるか。リストはスミスに對して彼の占める位置をより詳細に規定して、次の如く述べる。「それ（古典學派——筆者）は工業力を農業力と同一範疇に入れ……單なる農業國と農業國とのあひだには牧畜國と農業國とのあひだにおけるよりも遙かに大なる差別の存在することを見越してゐる」⁴⁾「農業生産力の性質が工業生産力の性質と如何に甚だしく相異してゐるかの洞察は、この學派には不可能であつた」⁵⁾「その限りでは、われ／＼は支配的な理論と完全に一致してゐることがわかる。農産物の交易に關して、學派が、最も廣汎な貿易の自由は、個人にとつても國家全體にとつてもあらゆる事情の下において最も有利なものである、とするのは完全に正しい。制限によつてこの生産をたかめることは出来るが、それによつて得られる利益は表面だけのものにすぎない……これに反して、工場生

3) List, a. a. O. S. 174

4) List, a. a. O. S. 180

5) List, a. a. O. S. 186

産力は別個の法則にしたがふが、これについては遺憾ながら學派は何も見えてゐなかつた⁶⁾。彼のこの直截な表明によれば、兩者の體系の根本的な相異は次の點にあるものとせられる。すなはち、スミスおよび彼の後繼者にあつては、生産力はいはば一般的、抽象的な形式においてのみ捉へられてゐるにすぎないが、これに對して、リストにあつては、生産力としては工業生産力と農業生産力とが峻別せられ、この兩生産力のもつ歴史的性質の差異の把握がその理論の出發點となつてゐること。

古典派においては、右に掲げたスミスの言葉からも容易にしられうる如く、社會の物質的生産力の問題は主として交換價値の見地から捉へられる結果、専ら利潤率あるひは蓄積率と關聯せしめてその發展が論ぜられるにすぎない。換言すれば、そこでは、生産力の發展を制約する他のより具體的な諸條件（農・工生産力の發展形式の差異はこれらの條件にもとづいて生じる）はひとまづ論外に抽象せられ、近代經濟社會におけるその發展の最も一般的な條件たる資本の蓄積が考察の主たる對象とせられる。かかる建前からすれば、「工業力を農業力と同一範疇に入れ」、兩者の差別をひとまづ論外に措くことは、理論の單純段階における方法論上の當然の要請に合致するものである。工業力と農業力との差別を考察することは、理論のより高次の段階に豫定せられるべきより複雑な課題にはかならない。そして、このことは、リストもまた二、三の箇所で率直にこれを承認してゐる。それゆゑ、この意味からすれば、スミスとリスト、古典派の自由貿易論と後者の保護主義とは、これを同一の水平面に並置して、兩者は相

6) List, a. a. O. S. 244

互に排除しあふものとして理解せらるべきではなく、後者は前者の理論のより具體的な發展として把握せられなければならない。

このやうにして、スミスの到達點はあたかもリストの出發點となる。しかれば、リストにおいては、農業生産力と工業生産力との歴史的性質の差異は、如何なるものとして把握せられてゐるか。しばらくまた、彼の所説をたゞることにしよう。

彼はいふ。「あらゆる部門に發達せる工業力は、各國民の文明、物質的繁榮および政治的勢力のあらゆるより高き飛躍の根本條件である」⁷⁾「工業およびこれに結合せる商業の繁榮にその力全體が依存する都市に比較すれば、國土の全表面に分散して居住する農業的人口の活動は、その全體の數が如何に大であらうとも、社會の狀態の維持改善に關しては、殆んど重要な意味をもたないものである」⁸⁾すなはち、農業に比較して工業生産力は無限に重要な價值をもつ、といふリストの基本的な命題はここに與へられる。

ついで彼は、次の如き諸々の論據を藉りて、この命題の支援につとめる。

第一。「工業は科學や藝術の子であり、同時にその教育者、扶養者である。……工業の隆盛な國におけるほど、完全な農業用機械器具はどこにも見られないし、また、農業がそれほど多くの智性をもつて營まれてゐるところはどこにも存在しない。工業の影響の下に、農業そのものが一の營業に、一の技術に、

7) List, a. a. O. S. 183

8) List, a. a. O. S. 236

一の科學にまで高められる。⁹⁾」

第二。工業の發展による自然的生産諸力の完全利用。「狩獵民は彼のすぐ近くを取巻く自然の千分の一も利用しないし、牧畜民はその百分の一も利用しない」「農業國において生産に役立つ最も主要な自然力すなはち土地の收穫能力ですら、農業が工業生産力によつて支持されない限りは、その比較的僅かな部分が利用されるに過ぎない。」「農業國に勃興しきたる工業力によつて、道路が建設せられ鐵道が敷設せられ、運河が開鑿せられ、河川は舟航できるやうにせられ……從來地中に眠つてゐたすべての礦物、すべての金屬までも利用せられ……かつては全く價値をもたなかつたこれらの資源は、國民生産表においてかつての全農業生産額をも遙かに凌駕する重要な位置を占めることが出来る。¹⁰⁾」

第三。人口の工業流出にもとづく農業生産の進歩。「かかる國（工業の不振國）の農業は、必然的に發育不良にならざるをえない。何故なら、大規模の國內製造工業が勃興する場合には、工業に就職先を見出し、農産物に大規模の需要を創りだし、その結果農業の利益を極めて大ならしめ、これを獎勵するであらうところの人口の増加は、いはたた農業にのみ赴き、國民の勢力、文明ならびに富にとつて最も有害な土地細分と小農制度とを創りだすからである。¹¹⁾」

第四。工業による農産物市場の創出。「工業の成長によつて大量の食糧品及び原料品に對する需要が生れる。¹²⁾」これにもとづく農業の商業化、耕地改良の促進。

9) List, a. a. O. S. 231

10) List, a. a. O. SS. 239, 240

11) List, a. a. O. S. 58

12) List, a. a. O. S. 240

ここにみられる如く、工業力の無限の價值を論證するにあたつて、リストのもちふる視點はすこぶる多岐にわたり、しかもそれらは少からず統一を缺くものといへる。しかし、これらの論點に精密な吟味と體系的整理を與へ、それから農、工の關係について具體的諸規定をひきだすことは、リスト研究、あるひは廣く經濟學に課せられた最終の目標の一つをなすものにはかならず、それはこの論稿に豫定せられてゐる當面の計劃の範圍外に屬する。ここではひとまづ次の事項、すなはち、彼にあつては、國民的繁榮の主導力は専ら工業生産力の發展に歸せられ、農、工の關係としては、農業に對する工業の主導的作用のみが殆んど一方的に捉へられ、それにもとづいて、農業に比較して工業力のもつ無限の價值が結論せられるといふことを確認するだけで満足しよう。

國民的生產における工業力の意義、農、工の關係を右の如く規定することから、農業國と工業國との歴史的性質の相異に關する彼の第二の命題が生まれる。「單なる農業國では、國民のうちに存在する精神のおよび肉體的諸力の最も僅かの部分のみが喚起、發達せしめられ、國民の利用しうる自然力および自然資源の最も僅かの部分のみが利用せられうるにすぎず、資本は全く集められないか、あるひは僅しか集めることは出来ない。ポーランドとイギリスを比較せよ。兩國民はかつては同じ文化段階にあつた。しかるに、現在では何といふ相異であらう。」¹³⁾そして、彼によれば、ポーランドとイギリスとのこの相異は、「牧畜國と農業國とのあひだにおけるよりも遙かに大なる」單なる農業國民と發達せる機械力をも

つ工業國民との相異であり、それはまた、農業力と工業力との歴史的意義の右の如き相異に立脚するものであるとせられる。前述の如く、さきに彼は、「諸國民の狀態に無限の差別が存在する」世界の現状の下において行はれる自由なる外國貿易は、その必然の結果として、後進的諸國民から工業力を奪ひ去り、彼等をして先進的工業國民への隷屬下に立たしめざるをえないことを論證し、この論證をもつて、スミスの萬民主義經濟學に對する彼の國民主義經濟學の發足點、その存立の支柱たらしめた。しかるに、外國貿易がかかる作用を與へられるのは、それによつて諸國民の農業國民と工業國民との分裂が深められるからであり、そしてまた、彼によれば、農業國と工業國、農業生産力と工業生産力とのあひだには右の如き大なる相異が存在するからにはかならない。そこで、われ／＼は次の事柄を確めうる。すなはち、前章（「體系」第十一章）における萬民主義經濟學と國民主義經濟學（あるひは、哲學と政策、理念と歴史）との對蹠は、次章における價值の理論と生産力の理論との對蹠と何らその意味を異にするものではなく、生産力の理論は國民主義經濟學の具體的な發展にすぎないといふこと。

（三）生産力均衡の理論

以上の如くにして、リストは、農業と工業、農業國と工業國とのあひだにみられる生産力の發展の差異から、外國貿易（すなはち、先進國の競争）が後進國の經濟的進歩に及ぼす抑壓的作用を基礎づけ、

農、工のかかる差別を抽象して、生産力一般の見地から、國民經濟の發展を促進する外國貿易の一般的作用を論ずる古典派の教義を補足する。生産力の理論と呼ばれる彼の體系のこの部分は、その保護主義思想の中心をなすものである。しかし、彼の思想はこの點だけに盡きるわけではなく、更に進んで第二の基礎づけが興へられる。「體系」第十三章「作業の國民的分割と國民生産諸力の結合」に展開せられてゐる生産力均衡の理論がそれである。

この場合にもまた、スミスに對する次の如き批判、すなはち、その分業論は作業の分割を「この自然法則の本質的なものと見做す」ことによつて、その協業的側面、換言すれば、作業の結合の意義を閑却するといふ批判をもつて、彼の理論の展開がはじまる。彼はいふ。「全工業——全農業に對立し、そして後者は前者に對立してゐる——は、兩者が相互に近接してゐるほど、また兩者がその交互作用において相互に妨げられることが少いほど、一層よく繁榮する¹⁾」「物質的生産における作業の最高の分割および生産諸力の最高の結合は、農業と工業とのそれである。前述の如く、兩者は相互に制約する。」「國民において、各個人、個々の各生産部門、最後に全體の生産性の基礎をなすものは、すべての個人の活動が相互に適當に釣合つてゐることである。われ／＼はこの釣合ひを生産諸力の均衡または調和と呼ぶ²⁾。」「このやうにして、彼は、農業と工業、各生産部門の一國內における均衡的な發達は、國民生産力の「無限の向上」を約束する根本的條件たることを指摘し、この主張は「體系」のあらゆる箇所において

1) List, a. a. O. S. 189

2) List, a. a. O. S. 196

反復せられる。

しかし、この場合、均衡が單に工業の育成を意味する限りでは、換言すれば、工業の農業に對する促進的作用だけが強調せられる限りでは、それは前章における生産力の理論の範圍を出えない。これが均衡の理論として別個の意義をもちうるためには、その逆の作用、すなはち、農業の工業に對する積極的な作用が、ここで補完的に論證されねばならない。それによつてはじめて、農業國と工業國の差別（生産力の理論の主題）から更に進んで、單なる工業國と農、工の調和的な發展をもつ新しい類型國との顯著な差別が把握せられうる。しかれば、この點は彼において如何に論證せられるか。これに關しては、次の如き一つの重要な記述が他の箇所に見出される。「しかしまた、田舎の地代を消費する人々の生活する都市が存在する……地代生活者の消費によつて都市の工業がいくらか促進されても、かかる工業は實らない不健全な果實と看做さるべきものである……かかる都市の豪華な贅澤の傍らには、貧窮、悲慘、無知、奴隸根性が地方の居住民の間に存在する」³⁾と。

そして、このことから、「農業力の不斷の萎縮化」に導く「農奴制、封建的重荷、勤勉や自由を妨害する法律と制度」を消滅して、「かつては主人と奴僕を養つたにすぎぬ農業」をして工業の「最も有能な守護者」の地位に引きあげること、略言すれば、農業生産における近代的諸環境の創出こそ、健全な工業力の勃興を約束する基礎的條件たることが強調せられる。⁴⁾この主張は、彼の體系を貫く主要な論點の一

3) List, a. a. O. SS. 234, 235

4) List, a. a. O. S. 237

つとなつてゐる。しかるに、彼は、この論點を更に前進せしめることなく、ここにおいてもまた、農業のかかる萎縮状態を救済するためには、國內工業の培養以外の手段は存在しないといふさきの生産力の理論に後退する。あるひは、わづかに、「戦争、國民的不和、商業恐慌、凶作等の場合」について、農工の結合の利益が論ぜられるか、「國內市場は外國市場より十倍も重要である」といふ抽象的な表現が與へられるばかりである。

均衡の理論を支持する他の重要な論點としては、後章にみられる次の如き彼の主張がここで指摘されねばならないであらう。元來特に工業に適してゐる溫帶の諸國は……主として熱帶諸國の消費に依存し、熱帶諸國は前者にその工業品の代りに植民地商品を提供する。しかし、熱帶諸國の工業品消費は、一方では、その地帯に特有な商品の過剰を生産するその能力によつて、他方では、溫帶諸國が熱帶の生産物に對するその需要を増加する割合によつて規定せられる」「イギリスが熱帶生産物に對するその需要をただ東インドからの輸入によつてのみ充しうる場合に、植民地商品を生産しつつあるすべての國々の工業市場を獨占することは、どうして可能であらうか。交換によつてその植民地生産物を受取りえないやうな諸國に對する工業品の販賣を、イギリスはどうして希望せねばならないであらうか」「それゆゑに、大陸における工場の抑壓はなるほど大陸諸國民の興隆を阻止するが、それは決してイギリスの繁榮を促進しうるものではないことは瞭かである。」この中にみられる溫帶國と熱帶國とを對置するその地理

主義的世界觀、ドイツにおける工業の育成を躁急に基礎づけんとするその餘りに政策的な意圖、あるひはまた、外國貿易の過程に關するその形式な把握を論外に措くならば、そこに示されてゐる次の如き方法と洞察のゆゑに、彼のこの主張は高い評價に値するものである。すなはち、彼はここで諸國民經濟の有機的な複合からなる擴大せられた總過程を考察する方法を採擇し、これによつて、「大陸における工場の抑壓は……決してイギリスの繁榮を促進しうるものでない」といふ極めて注目すべき洞察に到達する。

彼のこの見解は、農業國と工業國とを對置する前出の視點と關聯せしめられるときには、そこからは更に次の如き一般的洞察、すなはち、先進諸國の工業的獨占は後進諸國を農業狀態に停滯せしめることによつて、世界經濟の狹隘化作用を必然的に伴ふといふ洞察がえられ、それは、前述の生産力の理論のより具體的な展開として、そしてまた、均衡の理論に對する一つの有力な基礎づけとして、彼の保護主義體系において極めて重要な地位を占めることとなるであらう。